様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年４月２３日現在

研究種目：基盤研究（S）
研究期間：2007～2011
課題番号：１９１０３００２
研究課題名（和文）　グローバリゼーションと日本経済
ーヒト，モノ，カネ，社会共通資本ー
研究課題名（英文）　Globalization and the Japanese Economy
- People, Goods, Money, and Social Overhead Capital -

研究代表者
矢野　誠（Yano Makoto）
京都大学・経済研究所・教授
研究者番号：30191175

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：経済学・理論経済学
キーワード：経済理論，日本の所得，資産分布の動学的分析

１．研究計画の概要

20世紀の後半以来、著しい速度でグローバリゼーションが進展しており、学術的にも，その功罪について絶え間なく議論がなされてきた。これを受けて，本研究プロジェクトはグローバリゼーションの功罪を経済学的に分析しようという問題意識から出発した。

2008年秋のリーマンショックで顕在化した金融危機を通じて，不幸にして，我々の問題意識がきわめて時宜を得たものであることが実証された．情報や財の国際的な移動コストを大幅に低下させ，世界経済の未曾有の成長を導いたのも，サブプライム・ローン問題を世界の金融市場全体における派生証券の過剰供給に転換し，世界規模の金融危機を演出したのもグローバリゼーションである．

大恐慌以来といわれる深刻な経済危機を受けて，「グローバリゼーションと発展・安定」および「グローバリゼーションと分配の公正性」の解明という本研究のテーマの方向性の正しさを確認した．同時に，世界金融危機の危急性に鑑み，今後は，「グローバリゼーションと経済危機」を中心的テーマに加え，研究を行っていく．

過去１０年以上にわたって，矢野が提唱してきた「市場の質理論」は，このような目的の達成のために極めて有効であるというのが我々の見方である．この理論では，一般に，技術進歩は市場を支えるべき制度を現実の市場のあり方から乖離させ，「市場の質」を大きく低下させ，それが経済危機を創出するとされる．本プロジェクトでは，今後，この理論を金融危機との関連で立証していくことを具体的な目標の一つとする．

２．研究の進捗状況

本プロジェクトにおける研究成果は，当初の研究テーマに関して，幅広い成果を挙げてきた．以下では，その主たるものを紹介する．矢野は Yano and Honryo (2010) など3本の論文において，法制度を当初計画にある「社会共通資本」としてとらえるという見方を展開し，グローバリゼーションの進む経済における競争法の国際間協調の可能性を分析し，大きな成果を上げた．競争法の国際間強調の問題は法律の分野では広く取り上げられている．しかし，本来は，経済学的モデルを利用して，ゲーム理論的視点から分析されるべきものともいえる．そのような取り扱いは既存の経済学では行われたことがなく，本プロジェクトの成果は，この分野の先駆的業績と評価できる．

また，西村と矢野は Nishimura, Venditti, and Yano (2009, 2010) など，2 本の論文で外部性が存在する経済における景気循環の国際連動性の説明を行った．西村，新後閑，スタハースキーは，Benhabib, Nishimura, and Shigoka (2008) や Nishimura and Stachurski (2009)において，均衡の複数均衡やサンスポット均衡の存在を取り扱った．こうした貢献は期待と景気循環の関係を解明する上で大きな貢献とみなされている．柴田は Ono and Shibata (2010) などにおい

て，資産市場の国際的統合が進んだ経済における貿易パターンの研究で大きな業績を残した．照山と矢野（2010）は労働市場の制度と市場の質の関係に関する実証研究によって，近年の制度的改革によっても，なかなか向上に向かわないわが国の市場の質を実証的に跡付けることに成功した．この研究は，市場の質という新しい概念の最初の実証分析と位置づけることができる．

３．現在までの達成度

① 当初の計画以上に進展している．

各グループとも，当初予期したとおりの成果を着実に生み出すことができた．多数の研究が現在進行中であり，出版が決定，もしくはその直前の段階にあるものも多い．

本研究が予定以上の成果を見込まれるのは，金融危機や一般の危機の複雑系分析に関する部分である．2008年以来の未曽有の経済危機に対し，本研究の視点が，危機発生のメカニズムの解明や危機脱却の方策の設計に対し，極めて有益であるということが，「社会共通資本」，「ひと」，「もの」，「かね」，「数学的基礎」の各グループの研究やグループ合同の討論の中で，明らかにされた．さらに，矢野，西村，スタハースキー，柴田といった，最先端の複雑系分析の専門家であるメンバーを中心とした討論を通じ，制度的・実証的分析と複雑系分析の融合が危機の分析に非常に有益であることが確認された．現在この視点に基づいて，いろいろな角度から研究に着手しており，だれにも予測できなかった金融危機の勃発を契機に，本研究も，申請書作成時には予期しえなかった非常に大きな成果を生み出せると確信している．

また，本研究の基盤となる複雑系の数学的基礎にかかわる研究でも当初予想しなかった大きな研究成果が生まれつつある．特に，市場の質のダイナミックスの研究に端を発した矢野の研究は，離散的動学系の解の特徴づけに関して，解軌道図という画期的概念によって，連続モデルと同様の位相図による記述にほとんど成功しかけている．この研究が完成すれば，経済学だけでなく，数学の分野でも大きなインパクトを持つ可能性がある．

４．今後の研究の推進方策

「グローバリゼーションと経済危機」の分析という，すでに具体化した新たなテーマとともに，社会・経済における一般的な危機を，複数の主体の意思決定における負のコーディネーションと捉えて，それを複雑系によって分析しようという問題意識が本プロジェクトを通じて生まれつつある．これを通じて，自然科学で生まれた複雑系科学と社会人文科学で培われた意思決定科学を結ぶ大きな学際的研究につながる可能性も視野に入れている．

今後はそのような大きなテーマとバランスをとりながら進めていく予定であり，着実に前進させ，真に国際的な研究に育てていくことが必要と考えている．

５． 代表的な研究成果

〔雑誌論文〕（計 80 件）

① Makoto Yano and Takakazu Honryo, "Trade Imbalances and Harmonization of Competition," *Journal of Mathematical Economics*, March 2010, Forthcoming, 査読有

② Yoshiyasu Ono and Akihisa Shibata, "Time Patience and Specialization Patterns in the Presence of Asset Trade," *Journal of Money, Credit and Banking*, Vol.42, No.1, pp.93-112, 2010, 査読有

③ Jess Benhabib, Kazuo Nishimura and Tadashi Shigoka, "Bifurcation and Sunspots in the Continuous Time Equilibrium Model with Capacity Utilization," *International Journal of Economic Theory*, Vol.4 No.2, pp.337-355, 2008, 査読有

〔学会発表〕（計 30 件）

① 照山博司,「1990年代以降の日本の失業」，東京大学金融教育研究センター・日本銀行調査統計局第２回共催コンファレンス，日本銀行本店，2007年11月26日

〔図書〕（計 11 件）

① John Stachurski, *Economic Dynamics: Theory and Computation*, MIT Press, 373ページ，2009年

② 西村和雄・矢野誠（共著），『マクロ経済動学』，岩波書店，320ページ，2007年

〔その他〕ホームページ：
http://www.kier.kyoto-u.ac.jp/yano_project/KibanS/